
 学 会 記 事

第49回新潟癌治療研究会演題

日 時 平成6年7月16日(土)

会 場 新潟東映ホテル

2F 朱鷺の間

I. 一 般 演 題

1) 神経芽細胞腫の治療

—25年間, 102例の治療経験から—

内藤万砂文・岩瀧 眞
 内山 昌則・内藤 真一
 松田由紀夫・八木 実
 金田 聡 (新潟大学小児外科)

当科における神経芽細胞腫の治療は1969年に始まる。四半世紀を經過し手術症例は102例となった。神経芽細胞腫は従来より予後不良疾患の代表とされてきたが、本症をとりまく環境には大きな変化がみられた。積極的外科治療の導入、進行例に対する統一プロトコールによる集学的治療の導入、早期診断治療を目的としたマスキングの導入などがその主なものである。その結果、最近では長期生存例も多数みられるようになってきている。今回、自験例の治療および成績を経時的に供覧し神経芽細胞腫治療の現況を述べると共に、今後の展望についても検討してみたい。

2) 脳腫瘍の RF 組織内加温

高橋 英明・田中 隆一
 渡辺 正人・柿沼 健一
 須田 剛・高橋 祥 (新潟大学脳研究所)
 増田 浩・斎藤 明彦 (脳神経外科)

悪性脳腫瘍に対する RF 組織内加温法を新しい治療計画法とともに紹介し、その臨床成績を報告する。対象は悪性脳腫瘍症例30例(悪性グリオーマ22例、転移性脳腫瘍7例、悪性リンパ腫1例)である。加温は13.56MHz, RF波発生装置を用い、3~9(平均4.8)回行った。頭蓋内電極はCT誘導定位脳手術装置にて腫瘍内へ刺入し、留置した。照射と併用した例は16例で、再発例の大半は温熱単独例である。その結果、新しい治療計画法により安全かつ容易に加温が行えた。画像上、CR8例、PR10例、ST9例、PD3例の効果が得られた。副作

用として、髄液漏2例、腫瘍内出血1例、感染1例、症候性脳浮腫2例が認められた。以上から、脳腫瘍に対する RF 組織内加温は臨床で極めて有用であると思われる。

3) 再発悪性神経膠腫に対する CDDP+VP-16 による全身化学療法の検討

渡辺 正人・小野 晃嗣
 佐藤 光弥・妻沼 到 (新潟大学脳研究所)
 武田 憲夫・田中 隆一 (脳神経外科)

【目的】再発悪性神経膠腫に対する CDDP+VP-16 療法の効果と問題点について検討した。【対象及び方法】28歳から36歳の10例、平均46.4歳、投与方法はCDDP 20 or 30 mg/m², VP-16 60 or 90 mg/m² を5日間点滴静注するもので、これまで1~5クール、平均2.8クール施行し、総投与量はCDDP 150 mg~790 mg(平均468 mg), VP-16 450~3000 mg(平均1512 mg)で、1~11カ月、平均6.0カ月の follow-up を行った。【結果】治療効果判定はCTスキャンで行い、CR1例、PR2例、ST5例、PD2例であった。Performans statusは施行前KPS 50~90%で施行後40~100%で、治療後悪化した例はなかった。副作用として骨髄抑制を9例で認めうち8例でG-CSFを使用、3例で成分輸血を行った。また、不穏状態が2例で認められた。【結論】再発悪性神経膠腫に対する CDDP+VP-16 療法は30%の response rate であったが、その有用性についてはさらに症例を重ねて検討する必要がある。

4) 腎細胞癌における E-カドヘリンの発現；転移、予後との関係について

片桐 明善・渡部 竜助
 富田 善彦・谷川 俊貴
 武田 正之 (新潟大学泌尿器科)

癌の転移過程において、細胞が遊離する際には同種細胞間の接着機能の減弱が必要であると考えられる。そこで我々は、広く正常上皮に発現している同種細胞間接着分子 E-カドヘリンについて腎癌の原発巣および転移巣での発現を免疫組織学的に検索し、転移、予後との関係について検討した。

【対象と方法】腎癌原発巣106例と転移巣8例の切除標本より凍結切片を作成し、抗 E-カドヘリンモノクローナル抗体 HEC-1 を用いて免疫組織染色を行った。(平均観察期間:腎摘除術より32カ月または死亡まで)